

“ウロボロスの環”の再編  
——アニメ研究コミュニティにおける  
“権威”をめぐって——

Reforming of the “Ouroboros Strip” : Considering the “Authority within the Anime Studies Community

木村智哉（開志専門職大学 准教授）

# 三原龍太郎氏による指摘

- 「ウロボロスの環、あるいはアニメオリエンタリズム試論」  
『一橋ビジネスレビュー』2010年冬号
  - 北米のアニメファンコミュニティにおいては独自の「権威」が存在しており、その枠組みの先に議論を積み上げることで、新たな「権威」になるという自己充足的・自己増殖的な言説の構造 = “ウロボロスの環”が存在していることを指摘
- “Decolonising anime studies: a prolegomenon” “*Japan Forum*” Vol.37, 2025
  - 英語圏のアニメ研究が、いかに自らを「洗練された」「普遍的な」アプローチとして権威的な地位を確保してきたか？

# “ウロボロスの環”は再編成されたのではないか？

1. ではこの20年間、英語圏の“アニメ研究”は、相変わらず日本語圏の議論を全く無視してきたか？

➤むしろ英語圏のコミュニティと日本語圏の特定のコミュニティとの、  
相互依存の関係が構築され、それによって研究コミュニティ自体が  
再編成されてきたのではないか？

2. トマス・ラマールやマーク・スタインバーグなど、英語圏での  
特定の研究がもたらしたフレームワークが、日本語圏でも突出して  
利用・評価されている背景には何があるのか？

➤議論を英語圏コミュニティによる日本語圏コミュニティや“日本文化  
としてのアニメ”的無視／軽視／疎外／搾取というような、日本側を  
一方的被害者とみなすナショナリスティックな構図に落とし込まず、  
両者がもたれ合って構築してきた問題点を指摘したい

# 再編の契機としての『新現実』 vol.4 (2007.4.5)



- トマス・ラマール「トラウマから生まれて——『AKIRA』と資本主義的な破壊様式」（余田真也訳）
- トム・ルーザー「東京タワーズ：戦争の時代をスキヤンする欲望とアニメーション」（田中東子訳）
- 上野俊哉「転回のメタル／メディア・スーツ」
- 大塚英志「「文化映画」としての『桃太郎 海の神兵』——今村太平の批評を手懸りとして」
- ほか4者の座談会を収録

THE ANIME MACHINE  
A Media Theory  
of Animation

# アニメ・マシーン

グローバル・メディアとしての日本アニメーション

トーマス・ラマール  
Thomas Lamarre

藤木秀朗  
Hideaki Fujiki

大崎晴美  
Harumi Osaki

## なぜ日本は <メディアミックスする国> なのか

マーク・スタインバーグ Marc Steinberg

監修/大塚英志 訳/中川 譲



# アニメ・エコロジー

THE ANIME ECOLOGY

A Genealogy of Television, Animation, and Game Media

トーマス・ラマール 著

Thomas Lamarre

上野俊哉 監訳 大崎晴美 訳

名古屋大学出版会

英語圏研究成果の  
相次ぐ邦訳

- トーマス・ラマール (2009=2013) 『アニメ・マシーン：グローバル・メディアとしての日本アニメーション』名古屋大学出版会
- マーク・スタインバーグ (2012=2015) 『なぜ日本は<メディアミックスする国>なのか』KADOKAWA
- イアン・コンドリー (2013=2014) 『アニメの魂：協働する創造の現場』NTT出版
- トーマス・ラマール (2018=2023) 『アニメ・エコロジー：テレビ、アニメーション、ゲームの系譜学』名古屋大学出版会

➤ 邦訳にあたっては大塚英志、上野俊哉がサポートを行っている

テレビ、  
アニメーション、  
ゲームの系譜学

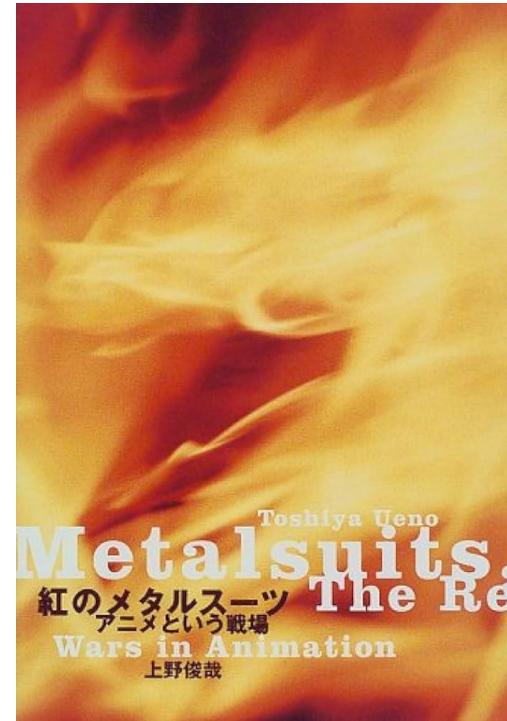
## 『アニメ・エコロジー』巻末解題の一節

30年近くなるつきあいのなかであらためて気づいたのは、自分がいかに「薄い」（半可通の）オタクにすぎず、逆にどれほど著者がディープなオタクであるか？ということでもあった。こう言われたことがある。「トシヤはさあ、メカとかサイボーグとか出てくるカッコいいマンガやアニメしか見ないもんね。『ケロロ軍曹』とか見ないとダメなんだよ……」。そのときは何だか意味がよくわからなかったのだが、本書の後半部分を読むと、彼の言わんとすることが今になって痛いほどわかるようになった。

- ジェネラリストとしての英語圏研究者と、英語圏の議論に適応したがゆえに視点の限定性を説かれる日本語圏出身研究者の構図
- 他方で英語圏の研究者が日本語圏の研究者から「自分よりもディープなオタクである」と承認される構図も見られる

# 日本語圏側の研究者の意図

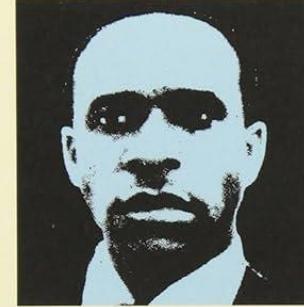
- ◆日本アニメ文化特殊論への批判としての試み
- 英語圏における「日本研究」「東アジア研究」というオリエンタリズムに基づく問題関心
- 日本語圏における自己礼賛的な「ジャパニメーション」論
- 「モダニズム、グローバル化全体の中でテクストとして取り上げようとしたときに対象としてのアジアって言うのは吹っ飛ぶ」（上野）
- 日本語圏でのオタク・コミュニティでの議論や、英語圏でのテクノ・オリエンタリズム的な批評への批判が、かえって英語圏でポピュラーな視点と方法論で論じることに繋がっていく過程
- 上野・大塚の前後する著作群にも共通して現れている姿勢



# フランツ・ファン（1951=1998） 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房

- 植民地の軍隊では（中略）原住民の将校は、まず通訳である。彼らは、同じ国の仲間に、司令官の命令を伝えるのに役立つ。また彼ら自身、幾分かの尊敬を払われている。
  - 白人の世界、すなわち真の世界を支持するか。そしてそのときはフランス語が使われる所以、幾つかの問題を考察し、結論において、ある程度の普遍主義に向かうということが可能である。
  - あるいは、ヨーロッパを、「奴ら」を拒否し、マルチニック的環境とでも呼びたい雰囲気の中に気楽に腰を落ちつけて、方言で気持ちを通じ合うか。
- 宗主国言語を使わなければ「普遍性」に到達できないがゆえに、ともすれば現地語環境を忌み嫌いがちになる知識人の精神構造の指摘

みすずライブラリー



## 黒い皮膚・白い仮面

フランツ・ファン

海老坂武・加藤晴久訳

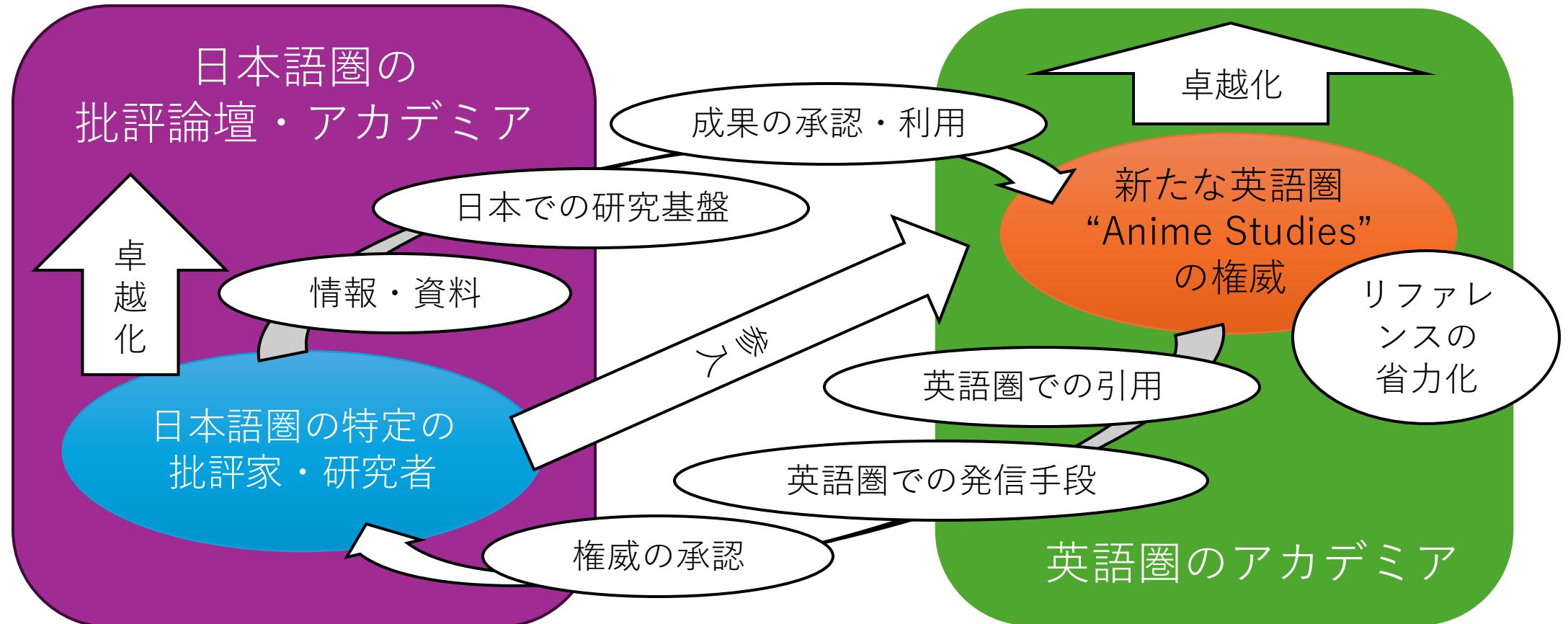
みすず書房



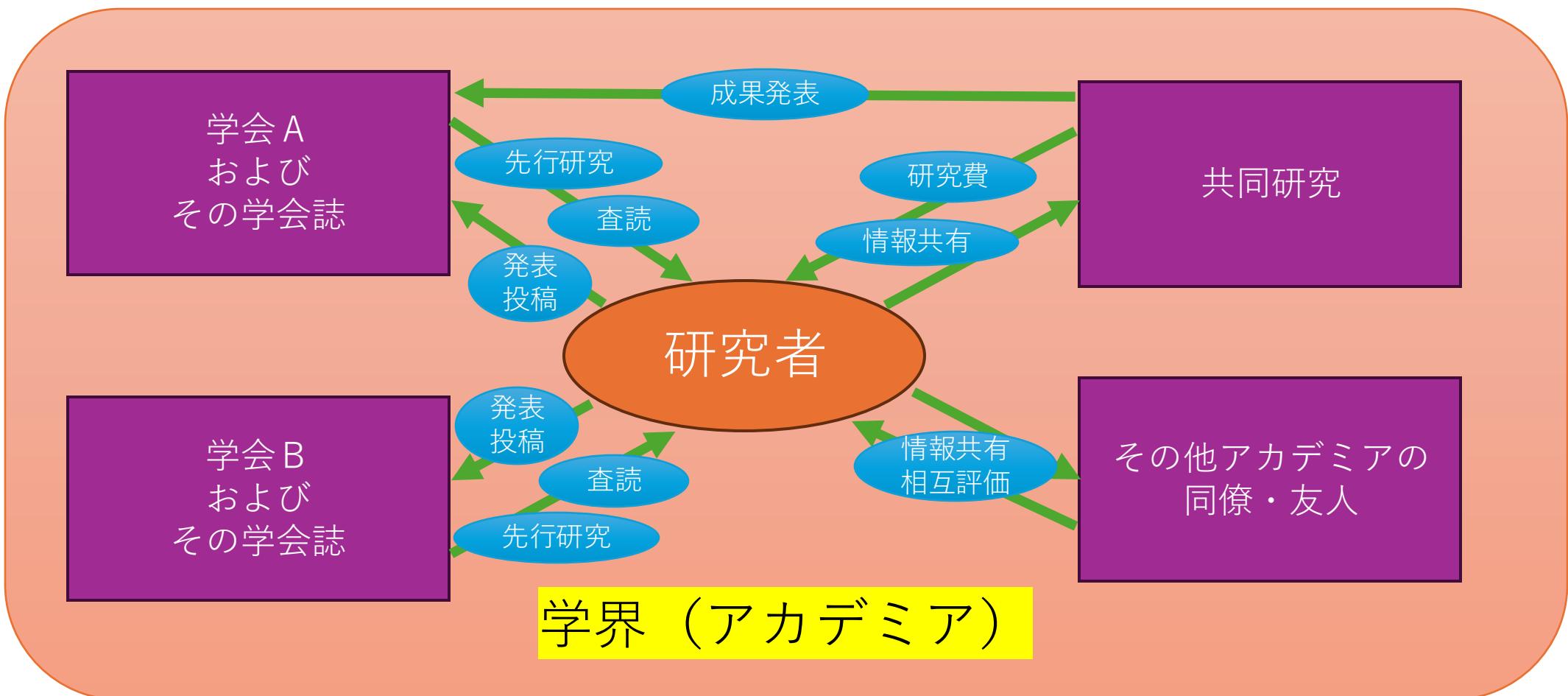
## “準帝国”としての日本

- 『TOBIO Critiques』（2014～）副題の「東アジアまんがアニメーション研究」
- 「まんが・アニメーション研究が「受信」するのもっぱら北米のフィルムスタディーズやジェンダー論、文化人類学などの「理論」で、その流行をいち早く応用して論文を書くという過去のアカデミアでの愚行が、この分野でも今更ながら繰り返されています」として、「在野」を含む各地域で行われている「慎ましやか」な研究成果を「受信」していくが本誌の役割と位置付ける
- 秦剛（中国）、蔡錦佳（台湾）、宣政佑（韓国）などアジア圏の研究者・批評家の論考を掲載
- 英語圏の議論を導入してきたことから一転して、他のアジア諸国の研究を承認・評価する立場へ

# 「洗練」された“ウロボロスの環”的形成



# コミュニティの中で行われる学術研究



トマス・ラマール（2023=2018）『アニメ・エコロジー：テレビ、アニメーション、ゲームの系譜学』  
 （上野俊哉・監訳、大崎晴美・訳、名古屋大学出版会）のリファレンス

著者名	参考文献数	参考文献タイトル	索引に見る言及回数
東浩紀	5件	『存在論的、郵便的』、『動物化するポストモダン』、『ゲーム的リアリズムの誕生』、『一般意思2.0』、『網状原論F改』	9回
大塚英志	3件	『定本物語消費論』、『ミッキーの書式』、『メディアミックス化する日本』	5回
志賀信夫	3件	『いま、ニューメディアの時代』、『昭和テレビ放送史』、『テレビ番組事始』	3回
吉見俊哉	2件	『都市のドラマトルギー』、「テレビが家にやってきた」（『思想』2003年12月号）	18回

# アカデミシャンである ことの意義と陥穼

Google Scholar



## 意義

- 個人の思い入れではなく普遍的な問題として共有し、共同でそれを解決できる
- 先人の研究成果を踏まえつつ根拠に基づいた論述を求められることで客観的かつ説得的な議論を構築できる
- 商業媒体ではなく、自立したアカデミアの媒体だからこそ言える/できることがある

巨人の肩の上に立つ

## 陥穼

- 狭小な研究コミュニティの中で考え、そこのみに向けて論じてしまう
  - 特定の先行研究の参照が一種の儀式化し、批判的再検証の過程が欠落する
  - 既存の枠組みに当てはまるよう事象を切り取り、収まらないもののを切り捨てる
- 批判的自由の空間の自主的投棄

# 人文・社会科学コミュニティにおける 東浩紀・大塚英志の卓越化

≡ Google Scholar

動物化するポストモダン

◆ 記事

約 3,980 件 (0.08 秒)

◆マジックワードのように多用される「データベース消費」や「物語消費」と  
いった語句・概念

・東浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン』 (講談社)

➤『新世紀エヴァンゲリオン』や「萌え」系文化、ノベルゲームのブームを前提として、そのトピックへ収斂するよう書かれており、事象の把握 자체は、かなり恣意的かつ断定的で矛盾を含んでおり、当初はむしろ上野俊哉やアニメ業界のライターからも疑念を呈されていた

・大塚英志 (1989) 『物語消費論』 (新曜社)

➤著者が述べるように、ニューアカデミックな論考でも自明のセオリーとして言及されることが、もともと多い

➤しかしこうした背景や議論の前提是、ほとんど再検証されず、日本語圏のアカデミックな論考でも自明のセオリーとして言及されることが、もともと多い

➤そのため英語圏の研究者がこれらを重用するのは、ある意味で当然

# コミュニティ内での生存戦略化する「権威」の利用

## ◆鶴見俊輔（1964）「言葉のお守り的使用法について」

➤ ……言葉のお守り的使用法とは、言葉のニセ主張的使用法の一種であり、意味がよくわからずには言葉をつかう習慣の一種類である。言葉のお守り的使用法とは、人がその住んでいる社会の権力者によって正統と認められている価値体系を代表する言葉を、特に自分の社会的・政治的立場をまとるために、自分の上にかぶせたり、自分のする仕事の上にかぶせたりすることをいう。

## ◆太郎丸博「投稿論文の査読をめぐる不満とコンセンサスの不在」（『ソシオロジ』2010年3号）

➤ 学会誌『社会学評論』と『ソシオロジ』の2000年代の投稿者比率を調べたところ、その8割が学生・非常勤講師・助手・研究員

➤ 縮小する日本の人文・社会科学コミュニティにおいて、二重の意味で地位が定まらない若手のアニメ研究者は、既存の権威化した枠組みを利用して「わかりやすい」業績を上げざるを得ない

# 「うしろめたさ」のないアニメ研究

(筆者注：国際日本文化研究) センターのスタッフにもよく聞かされたことだが、来日研究者の多くがすでにマンガ・アニメ世代で、日本文化への入口がポピュラー文化だったことを隠さなかった。私が大学院生だったころまでは、たとえ大衆文化に惹かれて日本研究に着手した人でも、学問的関心の焦点は近松の淨瑠璃にあり、あるいは三島由紀夫の文学なのだというポーズを崩していなかった。日本の経営についての組織論的な調査に従事しつつ、プライベートで趣味生活を充実させるという行きかたをしていたと思う。彼らも「二足のわらじ」を履き、ホンネとタテマエをつかいわけつつダブル・ライフを生きていた。ところが1990年代の日本研究は、のちに「クール・ジャパン」ということばでくくられる領域へ向かう、ストレートなアプローチを生み出した。そこに、遠慮やうしろめたさはない。

▶ 永井良和「文化社会学のおよそ40年をふりかえって」『社会学評論』第73巻4号（2023）

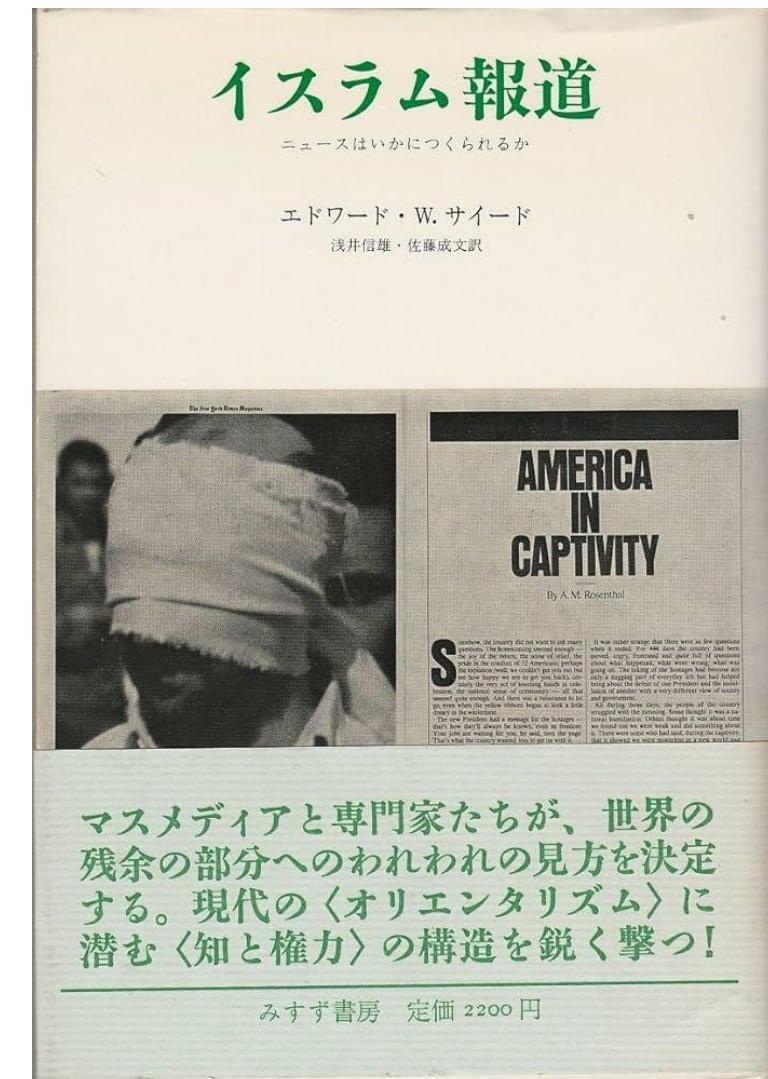
エドワード・W・サイード (1981=86)

『イスラム報道：ニュースはいかにつくられるか』

みすず書房

## ◆ 「中東研究」への批判

➤ 方法論について無神経だという事実は、マーケット（政府、企業、財団）の存在と完全に隣り合わせになっている。もし高く評価してくれる、あるいは少なくとも潜在的に受け入れてくれる顧客がいれば、何を、どういう理由でやるかなど聞いたりしないものだ。さらに悪いことに、学者たちは、その研究の対象となっている地域や人びとの言葉で考えることをやめてしまう。研究対象が「イスラム」であるなら、イスラムは対話の相手ではなく、ある意味では商品である。これによつて生じる全体的な結果は、一種の制度的な背信である。  
(中略) そして、学問的な自己贊美は現在の慣行を無限に強めていく。



# 再編された“ウロボロスの環”的現在

- 「アニメ研究」という新興分野において、日本語圏の研究コミュニティのゲートキーパーとなっている「権威」に言及することは、英語圏の研究者にとって「国際性」「学術性」、そして「誠実さ」をさえ担保する手がかりになる
- 自然これらの「権威」による著作は引用件数が増加し、再検証したい既成事実となってきた
- そして形成された英語圏の「権威」を、今度は日本語圏の研究者が引用して研究を行うようになった
- この前提を疑う議論は、築かれてきた「アニメ研究」の学術性そのものを掘り崩すことになりかねない（と考えられる）ので、非学術的（あるいは学術自体を否定する）議論として参照され難くなる
- “洗練された権威主義”的創出には、この研究コミュニティの宿痾が深く関わっているのではないか

# ではどうすればいいのか？

---

- 元来、理論や方法論とは、具体的で実証的な研究成果の蓄積を抽象化して出来上がったものに過ぎない
- 「お守り」化した概念・用語を安易に使う権威主義に陥ることなく、具体的な資料調査に基づいて学術的枠組みを再検証する地道な研究手法に戻るしかない
- 英語圏の議論だけでもコミュニティが形成可能なテクスト分析、メディア論、ファン研究だけでは、それはなしえない
- 英語圏からもたらされる議論に実証性に欠けた断定や分類があったときには、遠慮なく指摘・批判・修正をすべき（そうでないと事情に暗い日本語圏の研究者にも誤解が広がり、学術研究自体の信頼性が失われるし、若手研究者もますます研究にくくなる）
- 本来あるべき誠実な人文・社会科学の在り方＝“実証性”を重んずる“ごく普通”的な研究手法を実践できるだけで状況は好転するはず